

平成27年3月12日(木)

老球の細道126号

## 勝利の神も細部に宿る

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

元サッカー日本代表監督の岡田氏が横浜マリノスの監督に就任した際に、選手達がランニングしているのを見てびっくりしたという。走るエリアを区切るために四隅にカラーコーンが置いてあるところを、どの選手もコーンの外側ではなく内側をまわっている。岡田監督は、すぐにランニングをやめさせ、どうして内側をまわるのかと選手に聞いた。すると選手達は、「たいして変わらないからです」と答えたという。これを聞いた監督は、「お前達、コーンの代わりにコーチが立っていたらどっち側を走るんだ」と聞き返した。答えは明らかだった。小さなことや細かいことにも、細心の注意を払うことが、勝利へつながるというわけである。(「全国高体連ジャーナル2011」より)

プロのアスリートでさえ注意されないとこのザマである。岡田氏はワールドカップ代表チームにも「勝利の神は細部に宿る」を毎日のように繰り返し話をしたという。

「神は細部に宿る。C o d i s d e t a i l s」

この言葉は、ドイツの建築家ミース・ファンデルローエが言ったと言われている。彼は1886年ドイツで生まれ、1969年シカゴで死んだ。煉瓦職人、家具職人などを経て1912年ベルリンに自分の建築事務所を開いた。また、ドイツの美術史家アビ・ウアーブルグが好んで用いていたという説もある。解釈は色々ある。

「細部にまで手を抜かずきめ細かく配慮して作られたものは美しい」

「『細部』が『全体』の完成度に及ぼす影響を象徴的に表した」

「美しさと機能の追及はディテールの追求である」

「細部へのこだわりが、作品のクオリティーを決定づける」

「完璧主義者と呼ばれるほどに細部にこだわる」

「ものごとの本質はほんの細かいところによくあらわれる」

「細部まで手を抜くな、細部の作りこみで全体の完成度は決まる」

要は、細かいところを「手抜きするな」ということだろう。建築も美術もスポーツも同じである。完璧を目指し、愚直に昨日よりもほんの少しでも良いものを作ろうとする努力を続けることで優れたものづくりの方法や手段ができあがっていく。

バスケットボールのチーム創りも同じである。一年中どんな時でも地道にファンダメンタル練習を繰り返す。チーム全員が確実にスキル、プレーを身につけるために。ファンダメンタルは、まさに細かいところにポイントをおいて、愚直にひたすら繰り返すのみである。「ハンズアップ」「ゴールにつま先を向けろ」「腰を落とせ」「ボールを呼べ」「リングを見ろ」「ボールを強くつけ」等。ファンダメンタルはこのように細部にこだわる気持ちが必要なければ身につかない。アバウトはない。オール・オア・ナッシングである。

1円を粗末にする者は1円に泣く。バスケットボールも同じである。接戦を争う大事なゲームの勝敗は、1本のフリースロー、1本のレイアップシュートミス、1本のパスミスで決定づけられる。普段の練習において、このようなバスケットボールの細部を馬鹿にする者は、いざという場面で手痛い細部の洗礼を受けることになる。

私の髪も細部にだけ宿るようになった。いいのか悪いのか、神(髪)のみぞ知る。